

菊池短歌会

5月詠草

背戸山の斜面に枝垂る山吹の故事にあらはぬ花の明るさ 岩木 妙子
ジャカラランタの青紫の花盛る並木は続くロスの初夏 岩永 典子
なにとなく花疲れある心地して旅の日数を振り返るかな 梅田 昭子
茫々と今日の一日もゆかんとす初夏の落暉の何と眩しき 梅野かをり
たんぼぼの絮散る夕べ子猫らは親を離れて路地に遊べり 黒田 衣子
風薫る五月は近し菊池川水ぬるむらし魚影が光る 古賀 勝士
弟よ父よその忌の便りとも花しろく咲く遠き稚森 竹野美智代
雨だれの音絶へだへに春の雨ひとり炬燵に酔いとしむ 中川 愛子
檉若葉伸び目覚ましき一樹より古葉追はるることも散りくる 中原ちえ子
牡丹の花びら散りて卓上に淡きピンクをふわりと重ぬ 山代 静子

万句の里俳句会

5月句会

奥山は古代のままに朴の花 岩木 敬治
窓越しに浅間の旅の春惜しむ 中路 郁子
懐かしきものに朝の月見草 鋤本 トミ
庭の薔薇活けて佛間に香を満たす 田中ひさ子
樟若葉空に障間の無きほどに 東 鈴子
ジャスミンの香りいっぱい寺の庭 稲田 羚子
れんげ田に今は童の影もなく 大山 厚子
わが町のけやき並木路風薫る 梅田 昭子
雙鎌としてうぐひすの老をなく 光本とよいち
大阿蘇の五月の風をひとりじめ 小山 照子
にぎにぎし軒端の夫婦つばくらめ 田中 美智
名園の昔なつかし風薫る 吉井 綾子

肥後狂句桜会 例会入選句集より

窓開けて 無塩の風に深呼吸 小川 繁美
もう終わり 夜空染めよるナイアガラ 狩野 本六
耳ざわり 同級生は皆ミセス 窪田 明德
役立たん 案山子と遊ぶどる雀 須藤 新生
程度もん お礼返しの肝太さ 高倉 房恵
役立たん コネで入ってきた社員 高倉 新米
窓開けて 灯りも消して呼ぶ蛍 田尻 浩風

泗水短歌会

5月詠草

程度もん ほろ酔いまでが薬です 田中 孝幸
窓開けて 遠慮しいしい愛煙家 藤野 清子
耳ざわり グランドピアノ据えらした 水谷 ミネ
窓開けて すくく冷房切らず義母 光堀 善教
不足して 少子化に泣く保育園 太田 雄三
おが玉の香の匂ひ立つ午後三時香りにひかれ倉の横まで 増田久美子
青空を秀先ゆうらり撫でながら葉を散らしるいま竹の秋 大島 ひとし
ほととぎす声降り零す祖母の山木漏れ日揺るる沢水すくう 吉安 永子
借景のつつじの園の花あかり長きながあがき春の夕映え 福原美智子
牡丹散りまなく紅バラ咲き始む庭先見つめ幸せ気分 内田つね代
パソコンも科学も及ばぬ自然禍よサイクロン・大地震・テレビを見つむ 高藤タツノ
辞書を引く孫就職の「補任す」の語意を知りたり八十歳にして 中山 定子
二鉢のえびね日陰に植えなおす思い出こもる想いを込めて 長尾はるみ
大麦か小麦か定かに見えねども日増し色づく向い田一画 平嶋きくえ

せせらぎ俳句会

5月例会

昼顔が咲いて荒地の和みけり 藤本 邦浩
愚図る子にたんぼぼの絮吹かせやる 藤本アツ子
春暁の夢に絵筆を執つてゐし 村山 数恵
梅熟れて落ちるも只に見てをりぬ 坂本まつえ
便りより先に着きたる新茶かな 服部 静子
トンネルを抜けて山陰桐の花 寺本 和子
夏帽子追ひ駆ける子を追ひもして 五丁 義昭
阿蘇五岳隠しひねもす走り梅雨 内村 泊虹
ひらひらと葉が散つていく竹の秋 (中三) 渡辺 一史
寝ようとし耳に小さき蚊の音が (中三) 渡辺 大寿

七城短歌会

5月詠草

前立腺 何の役目ばしよるとな 宮上 美由
ややこしき もうそのままでよかばいた 平井 江彩
請求書 忘れた頃に取りこらす 御手洗三代
前立腺 のさん勝手に肥つとる 山隈 好茶

旭志文芸俳句会

5月詠草

特攻の知覧みやげの新茶注ぐ 芹川 蓉子
学童のかけっこ陽炎追ふごとく 水谷 ミネ
恙がなく生きて蔵のお味噌汁 東 芳子
喘ぎつゝ登る城址や藤の花 中尾ヨシコ
辿りつき若菜まぶしき峠かな 芹川のり子
露わらび春をぞん分夕食に 出田みどり

肥後狂句水笑会

5月例会

警察官 捕らえる人が捕らえられ 中島 五女
前立腺 寝る暇も無アトイレ起き 清原 英坊
ややこしき コンピューターも困つとる 吉岡 三水
前立腺 気安う切れて云う主治医 神尾 凡骨
ややこしき 検査すつとに検査さす 井手 水光
連れちいて 蛍が道ば照らしとる 柏原 乗仏
請求書 おてもパーくせ高過ぎる 続 義昭

北の窓若葉出揃い紫木蓮つとめ終えたる姿にさゆらぐ 堀 甲子
開放の身となり尋ね来たりしは若葉に香る高原の宿 村上 幾雄
孫送り来し幼稚園花過ぐも初夏の陽そそぎ新緑光る 森 道子
庭池に落ちたる赤き八重椿鯉遊ばせて水面にゆるる 高木 精
誘われし初心者我がのグラウンドゴルフ加減掴めずホールに止まらぬ 水田紗陽子
湧き水の池に菜洗う我がの指餌と思うか鯉がくわえる 木下 陽子
陽射し増し柿の若葉に茶の芽ばえまばゆきばかりの初夏となりたり 斉藤 芳子
亡き夫の真似して草取鎌を研ぎ来たる畑に草取る切れ味悪し 岩崎 照代
G・G球技の賞品抱きて夫婦る褒め労えば微かに笑みぬ 池田カツ子

排水路の草をばかがる手は危険知らず潜める蜂かに刺さるる 佐々 重弘
おわびと訂正
前号の「七城短歌会4月詠草」に一部誤りがありました。おわびして訂正します。
●3句目の氏名
誤(×) 緒方 寛
正(○) 緒方 寛子